

豊穰への願いと感謝

収穫祭

豊かな自然と四季に恵まれた日本。その中で、それぞれの風土で独自に発展し、有形のもの、無形のものがある。多様に育まれてきた貴重な文化があります。今回は実りの秋に多く行われる、各地のさまざまな収穫祭についてお伝えします。

収穫祭の成り立ち

収穫祭は豊作を祈ったり、無事に収穫できたことを感謝したりする農村を中心とした祭礼行事の一つで、全国各地でさまざまな様式や風習の収穫祭があります。

稲作が中心の日本では主に「穂掛け祭」「刈上げ祭」「扱上げ祝い」といった三つの収穫の儀礼があります。

「稲刈りに先立って行われる」「穂掛け」では、稲穂を神前にかけ、新米の焼米を供えて祀ります。稲刈り終了時の「刈上げ」は収穫祭の代表です。そして、収穫の締めくくりとして、稲扱き(＝脱穀のこと)が終わったあとの「扱上げ祝い」となります。

収穫祭の中心をなす「刈上げ」には、全国でさまざまな祭りがありますが、

東北で旧暦9月の9の付く日に行われる「三九日」、関東・中部の旧暦10月10日の「十日夜」、西日本の「亥の子」、九州の「霜月祭り」などが有名で、仕事に用いた鎌と収穫した稲を積み上げ、供え物しながらお祭りします。

こうした「刈上げ」の祭礼には、農作業を見守ってくれた田の神への信仰に係したものが多く、田植えのときに山から里へ下ってきた田の神が、再び山に戻るときに感謝を捧げるもの、豊穰を感謝して田の神を家に迎えるものなど、いくつかのバリエーションがあります。

例えば、旧暦10月10日に行われる長野県の「案山子上げ」は、この日、山に帰る田の神を見送る祭りです。農作業の終わった田から案山子を家に持ち帰って庭先へ立

て、臼と杵を置き、案山子の笠を燃やして焼いた餅を供えて感謝を捧げます。いまでは案山子というと、スヌメやカラスを追い払うために田畑に立てた人形としか思われていませんが、もともとは、田の神が現世に現れた姿だったのです。

また、能登半島に伝わる国の重要無形民俗文化財である「アエノコト」と呼ばれる行事は、田んぼから家に戻ってきた田の神を家に迎え入れる儀礼です。12月5日の夕方に主人が正装して田におもむき、田の神を家に招き、風呂に入れ、ごちそうをさし出します。姿が見えない田の神を、目の前に神がいるかのように演じるのが特徴です。「アエ」とは「饗応する」ということで「無事に収穫できた作物を神に捧げ、感謝する」伝統がいまも残っているのです。



案山子上げ
長野県では田から持ち帰ってきた案山子を庭先に立てて、臼と杵を置いて餅を供えます。



丑の日祭り(霜月祭りの一種 ※諸説あり)
九州北部の一部(佐賀県あたり)で行われる収穫祭で、霜月(11月)の丑の日に行われます。今でも一部ではこうした珍しい収穫祭が根強く受け継がれています。

「お月見」と「芋煮会」

いまではすっかり秋のイベントとして定着している「お月見」と「芋煮会」も、収穫祭の一つです。

旧暦の8月15日(十五夜)と9月13日(十三夜)にお団子とススキなどをお供えして名月を觀賞する「お月見」は、その昔中国から伝わり、平安時代に行事化されたようです。この「お月

見」は前述の「穂掛け」のバリエーションと考えられています。「お月見」を「芋名月」と呼んでサトイモを供える風習が残っている地方があるのは、その表れです。

「芋煮会」は青森県以外の東北地方で行われている行事の一つで、江戸時代ごろに、米の不作に備えた非常食でもあるサトイモの収穫時期に収穫祭として始まったといわれています。現代の「芋煮会」は家族や地域などの親睦を深めるために発展してきました。近年では村おこし・町おこしとしても催されるようになり、秋の野外行事としては、春のお花見と双璧をなすイベントとして定着しているといつてよいでしょう。

サトイモはコメよりも古くから栽培されてきたと数年前までは考えられていました。しかし現在は、畑作も稲作も、そして家畜の飼育までも同時に日本に入ったという研究成果が重くみられているようです。

身近に楽しむ「お月見」や「芋煮会」などのイベントを通じて、農作物の豊穰への願いや感謝を行ってきた歴史と、昔の人々に思いを馳せるのもよいのかもしれません。



十五夜の月見とお月見の供え物



奥能登の旧家で現在も行われている「アエノコト」。田を守ってくれた神を家に迎え、収穫した品々を供えて祀る行事です。



資料提供:萩原秀三郎
参考資料:「図説 民俗探訪事典」山川出版社